

第3学年 社会科学学習指導案

場所 : 大野町立大野中学校

3年4組教室

学級 : 3年4組 (33名)

授業者 :

〔公民的分野〕

単元名 国の政治の仕組み

1. 指導の立場

(1) 単元について

学習指導要領に示された本単元での指導内容は、以下の通りである。

(2) 民主政治と政治参加

対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付ける事ができるように指導する。

イ 地方自治や我が国の民主政治の発展に寄与しようとする自覚や住民としての自治意識の基礎を育成することに向けて、次のような思考力、判断力、表現力等を身につけること。

(ア) 民主政治の推進と、公正な世論の形成や選挙などの国民の政治参加との関連について、多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。

本単元では、「国会」「内閣」「裁判所」といった国の政治の仕組みを取り扱う。三権の役割や地位に加え、三権それぞれに国民が関わる事が可能であることへの理解を目指す。また、後に主権者となり、わが国の未来を牽引していく生徒が、わが国の制度やそれに付随する諸課題を当時者意識でもって捉え、解決しようとする意欲を育成したい。

わが国では2009(平成21)年より、国民感覚を裁判に反映させるとともに、司法に対する理解と信頼を得ることを期待して裁判員制度が導入されてきた。最高裁判所の調査によると、裁判員として参加した者の満足度は96.3%と高い。一方で、国民の約7割が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答している。その要因は「自分の判断で被告人の運命が決まるため、責任を感じる」といった心理的な負担や、「仕事や育児で忙しい」「高齢で裁判所に赴くことが難しい」といった現代社会情勢の変移の様相を呈しているものなど様々である。

本時では、現行の裁判員制度の課題解決のために、既習の知識を活用しながら、「どのような工夫をすれば、国民が司法参画しやすくなるか」個人で追究したことを基に、「効果的か」「実現可能か」について他者と対話する活動を通して、裁判員制度の課題を多面的かつ多角的に捉え、解決策を表現するとともに、他者との対話の中で考えを深化させていくことを目指す。オープンエンドな授業展開になるが、生徒が現代社会における課題を自分なりに解決しようとする態度や

限りある枠組みの中で、優先順位を付けながら社会的事象を考える力の育成こそが主権者教育の第一段階であり、大きな意義があると考えられる。

(2) 生徒の実態

生徒はこれまでの学習で「立法・行政・司法の三権にそれぞれの役割や地位があること」「裁判員制度は国民感覚を司法に反映させるとともに、司法に対する理解と信頼を得るために導入されたこと」「裁判員制度における様々な仕組み」「裁判員制度に対して約7割の国民が『心理的負担』や『自身を取り巻く環境』が要因で負のイメージを抱いていること」を理解し、「私たちが参加しやすい裁判員制度」にするための工夫を個人で追究している。本時では、他者との対話の中で「実現可能かつ効果的な案」を選択・判断する活動を通して、裁判員制度やそれに付随する課題をわが事として捉え、主体的に司法参画していこうとする意欲や枠組みの中で優先順位を付けながら考える力を育成したい。

2. 研究との関わり

【研究内容2-①】について

本時は既習の裁判員制度に関する知識や公民的分野で身に付けた現代社会に関わる知識、公民として実生活を送る中で得た知識を活用し、現行の裁判員制度の課題解決策を生徒自身で提案する授業展開である。個人追究をした後、小集団で「最も実現可能で効果的な案」を選択・判断し、専門家へ提案する。課題の解決に向けて他者との対話を行う中で、物事の優先順位をつける考え方を身に付けたり、相手に伝える技能を磨いたりすることで、研究主題である「社会で生きる力を身に付けた生徒の育成」や社会科部の目指す「主体的に社会に参画できる生徒の育成」の実現に近づくことを期待する。

【研究内容2-②】について

本時の終末には、「自分の意見」「班員の意見」「ゲストティーチャーの話」を踏まえて「自分がどのように裁判員制度に参画するか」記述させる。他者との対話や、司法の専門家の話を聞くことを通して、自己の考えが如何に変容したか、生徒自身が実感できるような振り返り指導の工夫を行う。また、振り返りの内容に生徒自身の考えや思いを表出できるような条件付けを行うことで、社会的事象をわが事として考えることができる生徒の育成を目指す。

3. 単元構造図(全11時間)

【単元のねらい】

議会制民主主義に関する学習を通して、民主政治が権力分立により国民の自由や権利を守るとともに、国民の意見が反映される仕組みを持っていること、国民の積極的な政治参加により民主政治のさらなる発展に寄与することが大切であることに気づき、主体的に政治に参画していこうとする意欲と態度を養うことができる。

【単元はじめの生徒の意識】

わが国では、国民の投票によって決められた代表者が議会で物事を話し合う議会制民主主義が採られている。国民の意見が政治に反映されたり、国民が正しい秩序の下でよりよい豊かな生活を送れたりするために、国会・内閣・裁判所はどのような役割を果たしているのだろうか。

国の政治の仕組みに関する認識の獲得

【① 国会の地位と仕組み】

課：国会は政治の中で、どのような地位や役割を果たしているのだろうか。

<ねらい>

国会中継や国会議員の仕事に関する資料を読み取り、国会の地位や役割を理解することを通して、日本国憲法の三原則である国民主権を具現化するために国会が位置づいていることを説明することができる。
(思・判・表)

<生徒の意識>

国会は国民の生活に関わる重要な話し合いが行われており、国権の最高機関で唯一の立法機関と位置づけられている。国民の意見は慎重に反映させるために、衆議院と参議院で構成される二院制があることが分かった。国民の権利や豊かな生活を守るために、私たちに何ができるのか考えていきたい。

【② 法律や予算ができるまで】

課：国会では、何をどのように審議しているのだろうか。

<ねらい>

国会で審議された議案を読み取ることを通して、国民の豊かな生活を実現するために委員会を中心として慎重に審議され、審議中も国民の意見をより反映しやすくするために、衆議院の優越が認められていることを理解することができる。
(知・技)

<生徒の意識>

国会では法律の制定や予算の審議、内閣総理大臣の指名などを行っていることが分かった。審議は、両院の委員会や本会議を通して、慎重に進められている。また、国民の意見をより反映しやすくするために、衆議院の優越が認められている。

【③ 行政を監視する国会】

課：国会と行政はどのように関わっているのだろうか。

<ねらい>

国会と内閣に関する資料の読み取りを通して、国会は国権の最高機関として、内閣が国民の意見を適切に反映しているか、国民の豊かな生活を阻害していないか、監視する役割があることを説明することができる。
(思・判・表)

<生徒の意識>

国会には国権の最高機関として、国会での決議が実施されているか監視する役割がある。国政調査権を持ち、内閣総理大臣の指名や条約の承認などの仕事を行っている。また、裁判所に対しても、弾劾裁判所を設置し、公正な司法を維持することで、国民の豊かな生活を守るための仕組みが整っていることが分かった。

【④ 行政の仕組みと内閣】

課：内閣はどのような仕組みで役割を果たしているのだろうか。

<ねらい>

首相官邸 HP から内閣の仕事や役割を読み取る活動を通して、国会の決議や法律を元に、国民の生活が豊かになる政策を行うとともに、議院内閣制により国会と均衡を保ちながら役割を果たしていることを理解することができる。
(知・技)

<生徒の意識>

国家の議決や法律で定められた事項を実行することを行政といい、行政の指揮を内閣が担っている。わが国は議院内閣制を採っており、内閣は国権の最高機関である国会が選んだ内閣総理大臣を中心に組織され、国会に対して連帯して責任を負うなど、互いに均衡を取っている。

【⑤ 行政の役割と行政改革】

課：なぜ政府は規制緩和などの行政改革を進めているのだろうか。

<ねらい>

規制緩和の歴史をふまえて「小さな政府」と「大きな政府」を比較し、財政の逼迫と関連付けで理解する一方で、行き過ぎた規制緩和には安全面での懸念があることに気づくことができる。
(思・判・表)

<生徒の意識>

政府は規制緩和を行うなどの行政改革を行っている。わが国は「小さな政府」であるべきだと考えられているためだ。政府の役割が大きいと財政がひっ迫し、民間の仕事も奪いかねない。規制緩和がすすむと、一部の仕事へ自由に参加できるようになるかもしれないが、安全性等の課題もあるため、継続して見守る必要がある。

【⑥ 裁判所の仕組みと働き】

課：生活において、裁判はどのような役割を果たしているのだろうか。

<ねらい>

過去の裁判に関する資料を読み取ることを通して、裁判の意義を理解するとともに、司法権の独立の原則や三審制が必要な理由を人権の尊重の観点から説明することができる。
(思・判・表)

<生徒の意識>

人間は社会の中で生きており、時に対立することがある。個人の権利を守るために、法に基づいて公正な視点で紛争を解決するための機関として、裁判所が位置づいている。三審制や司法権の独立の原則により、裁判を慎重に進め、公正な判断をすることで、人権を守る仕組みになっている。

【⑦ 裁判の種類と人権】

課：人権を守るために、裁判はどのような仕組みがあるのだろうか。

<ねらい>

裁判の種類や仕組みに関する資料を読み取ることを通して、裁判に関わる様々な立場の人物の人権を守り、公正に裁判が行われるための工夫を理解することができる。
(知・技)

<生徒の意識>

裁判には主に民事裁判と刑事裁判があり、裁判官・弁護士・検察官などが主体となって裁判を進める。裁判の中では被告人の権利を守るために、国選弁護人を頼む権利や、黙秘権などが認められている。えん罪の可能性もあることから、今後も慎重な捜査や、公正な裁判にするよう努力する必要がある。

【⑧ 裁判員制度】

課：裁判員制度が行われるようになったのはなぜか。

<ねらい>

裁判員制度の仕組みや実施への経緯を追うことを通して、司法に国民の良識を反映させたり、国民の理解を深めたりすることで、司法への信頼を高める目的を理解することができる。
(知・技)

<生徒の意識>

国民が裁判員として裁判に参加する裁判員制度が始まった。裁判に国民の視点や感覚を反映させたり、司法に信頼度を高めたりする目的がある。実際に裁判員として裁判に参加して「(非常に)よかった」と感じた割合は96.3%であり、充実感をもって職務にあたっていることが分かった。

【⑨⑩ 裁判員制度と司法制度改革(本時⑩)】

課：私たちが参加しやすい裁判員制度にするためには、どのような工夫が必要か。

<ねらい>

約7割の国民が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した要因を踏まえ、私たちが参加しやすい裁判員制度にするための工夫を個人で追究したり、小集団で実現可能で効果的な案を選択・判断したりする活動を通して、裁判員制度やそれに付随する課題をわが事として捉え、主体的に司法参画していこうと考えることができる。
(思・判・表)
(学びに向かう力)

<生徒の意識⑨>

約7割の国民が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した。その要因は、重い責任や証拠品を見ることに不安を感じたりする「心理的負担」が大きいことや、仕事や育児、介護などの「自身を取り巻く環境」が要因となることが分かった。参加しやすい裁判員制度にするためには、手続き期間中に子育てや介護によって家を空けることが難しい場合に、託児所や介護施設などの社会サービスの無償提供が必要だ。

<生徒の意識⑩>

参加しやすい裁判員制度にするためには、裁判員の環境を整える必要がある。特に子供や高齢者と同居していると、長期間家を空けることが難しい。審理期間中は介護施設や託児所の無料サービスを提供すれば良いと考えた。しかし、班員は心理的な負担を軽減する策を考えていた。最高裁判所の調査では、心理的な負担を感じている人が多いため、環境の改善よりも心理的な負担を軽減する策の方が効果的だと気づいた。裁判員として公正な判決ができるか自信がなかったが、弁護士の方から話を伺って、司法のねらいを実現するためにも、裁判員に選出されたら必ず参加したい。

【⑪ 三権の抑制と均衡】

課：三権分立制に参画するために、わたしたちは何を心がけるべきだろう。

<ねらい>

国民の社会参画の低さを解決するための方法の追究を通して、政治の仕組みの既習内容を関わらせながら自分の考えを書くことができる。
(学びに向かう力)

<生徒の意識>

三権分立は、国の政治権力を三権に分け、権力の集中を防ぐ制度である。国民はこれらすべての三権に対して、選挙、世論、国民審査、裁判員制度の方法で関与することができる。未来を担う主権者として、様々な出来事に興味を持ち、政治を我が事として考える態度を大切にしたい。

【単元出口の生徒の意識】

国会・内閣・裁判所は、私たちの生活とは程遠いものだと思っていた。しかし、主権者である国民の意見が反映されやすい仕組みになっていることが分かった。政治や裁判は難しそうなおイメージだったけれど、わが国の未来を担う主権者として、立法・行政・司法を自分事として考えていくことが大切だと分かった。まずは、新聞やニュースを通して、わが国の課題は何かあるのか調べてみたい。

【単元を貫く課題】国民の権利や豊かな生活を守るために、私たちに何ができるだろう。

〈国会〉

〈内閣〉

〈裁判所〉

4 本時のねらい

約7割の国民が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した要因を踏まえ、私たちが参加しやすい裁判員制度にするための工夫を個人で追究したり、小集団で実現可能で効果的な案を選択・判断したりする活動を通して、裁判員制度やそれに付随する課題をわが事として捉え、主体的に司法参画していこうと考えることができる。

5 本時の展開

過程	学習活動	研究内容について				
導入	1. 既習内容を想起させ、学習課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「心理的な負担」「自身を取り巻く環境」が要因で、約7割の国民が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答したことを確認する。 ・「心理的な負担」と「自身を取り巻く環境」から1つ選択し、具体的方策とその理由を発表ノートにまとめている。 				
	<p>私たちが参加しやすい裁判員制度にするためには、どのような工夫が必要か。</p> <p>2. 課題に対して追究した個人の考えを確認する。</p> <p style="text-align: center;">【心理的な負担】 【自身を取り巻く環境】</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>メンタルサポート窓口の周知を徹底すればよい。裁判では、遺体写真等の証拠を見たり、自分たちの判決で被告人の運命が決まったりするなど、心理的な負担が大きいからだ。</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>企業には裁判制度参加に際して、休暇を認めることが法律によって定められているが、実際は休みを取得しにくい雰囲気もあるはずだ。休暇を認めた企業に国から保障をするなどして、休暇制度を拡充させていけばよい。</p> </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <p>裁判員経験者の満足度は高いと学習したが、実際に社会で生きる中で、感想聞くことは少ない。司法が主体となって裁判員経験者によるPRを行うことで、私たちもイメージが持ちやすくなると思う。</p> </td> <td style="vertical-align: top;"> <p>男性より女性の方が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した割合が高い。これは育児や介護による負担が大きいためだと考える。裁判員となった者には審議期間中の託児所や介護施設の無償提供をすればよい。</p> </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <p>学校における法教育をより拡充していく必要があると思う。小学校から裁判や法について学んだり、中学校においても、法律や裁判の専門家である裁判官や弁護士から話を聞くことができたりすると司法に対する親近感が湧くと思う。漠然とした不安も軽減することができるのではないか。</p> </td> <td style="vertical-align: top;"> <p>裁判員裁判のうち、約45%が8日以上費やしているという実態がある。裁判官などの専門家があらかじめ事件の要点を簡潔にまとめ、審理日数や1日における拘束時間を短縮していけば、参加しやすい裁判員制度になるのではないか。</p> </td> </tr> </table>		<p>メンタルサポート窓口の周知を徹底すればよい。裁判では、遺体写真等の証拠を見たり、自分たちの判決で被告人の運命が決まったりするなど、心理的な負担が大きいからだ。</p>	<p>企業には裁判制度参加に際して、休暇を認めることが法律によって定められているが、実際は休みを取得しにくい雰囲気もあるはずだ。休暇を認めた企業に国から保障をするなどして、休暇制度を拡充させていけばよい。</p>	<p>裁判員経験者の満足度は高いと学習したが、実際に社会で生きる中で、感想聞くことは少ない。司法が主体となって裁判員経験者によるPRを行うことで、私たちもイメージが持ちやすくなると思う。</p>	<p>男性より女性の方が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した割合が高い。これは育児や介護による負担が大きいためだと考える。裁判員となった者には審議期間中の託児所や介護施設の無償提供をすればよい。</p>
<p>メンタルサポート窓口の周知を徹底すればよい。裁判では、遺体写真等の証拠を見たり、自分たちの判決で被告人の運命が決まったりするなど、心理的な負担が大きいからだ。</p>	<p>企業には裁判制度参加に際して、休暇を認めることが法律によって定められているが、実際は休みを取得しにくい雰囲気もあるはずだ。休暇を認めた企業に国から保障をするなどして、休暇制度を拡充させていけばよい。</p>					
<p>裁判員経験者の満足度は高いと学習したが、実際に社会で生きる中で、感想聞くことは少ない。司法が主体となって裁判員経験者によるPRを行うことで、私たちもイメージが持ちやすくなると思う。</p>	<p>男性より女性の方が裁判員制度に「(あまり)参加したくない」と回答した割合が高い。これは育児や介護による負担が大きいためだと考える。裁判員となった者には審議期間中の託児所や介護施設の無償提供をすればよい。</p>					
<p>学校における法教育をより拡充していく必要があると思う。小学校から裁判や法について学んだり、中学校においても、法律や裁判の専門家である裁判官や弁護士から話を聞くことができたりすると司法に対する親近感が湧くと思う。漠然とした不安も軽減することができるのではないか。</p>	<p>裁判員裁判のうち、約45%が8日以上費やしているという実態がある。裁判官などの専門家があらかじめ事件の要点を簡潔にまとめ、審理日数や1日における拘束時間を短縮していけば、参加しやすい裁判員制度になるのではないか。</p>					
展開前段	3. 班で最も実現可能で効果的な案を選択・判断する。	<ul style="list-style-type: none"> ・SKYMENUのグループワーク機能を活用し、班員の意見が手元のタブレットで閲覧できるようにする。 ・司会者を中心に、ポジショニングシートに班員の意見を位置づけていくようにする。 ・「裁判員制度に関わる知識」「公民的分野で学習した現代社会に関わる知識」「公民として実生活を送る中で得た知識」などを踏まえて追究している生徒を積極的に価値づける。 <p style="text-align: right;">【研究内容2-①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班員の意見をマッシュアップし、さらに実現可能で効果的な案を提案してもよい。 				
	<p>4. 班で集約した案をゲストティーチャーに提案する。</p> <p>5. ゲストティーチャーの話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提案に対してのご講評 ・裁判員制度の導入にどのようなニーズがあるのか。 ・国民が裁判に参加する難しさ。 ・司法のねらいを実現するためにはどうすればよいのか。 <p>6. 本時のまとめを記入する。</p>					
展開後段	<p>事件の要点を簡潔にまとめても、約45%が裁判手続きに8日以上費やしている。育児や介護、仕事に与える影響は大きく、託児所などのサービスの無償提供や裁判員選出者の勤める会社への保障は効果が高いと言える。しかし、国がその費用をどこから賄うかが課題である。多くの費用がかかるため、実現可能とは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・既習の知識を活用し、「実現可能か」「効果的か」の2つの視点で各意見をポジショニングすることで小集団間での意見の深化を図る。 【研究内容2-①】 				
	<p>前回の学習で用いた「裁判員裁判に参加する場合の心配や支障となる要因」の資料によると、大半が「心理的な負担」によるものだった。「自身を取り巻く環境」よりも「心理的な負担」を解消した方が効果的だ。メンタルサポート窓口の周知や、裁判員経験者によるPRはすぐにも行えるので、他の策よりも実現可能だと思う。</p>					
終末	<p>参加しやすい裁判員制度にするためには、裁判員選出者の環境を整える必要がある。特に子供や高齢者と同居していると、長期間家を空けることが難しい。裁判手続き期間中は介護施設や託児所の無料サービスを提供すれば良いと考えた。しかし、班員は心理的な負担を軽減する策を考えていた。最高裁判所の調査では、心理的な負担を感じている人が多いため、環境の改善よりも心理的な負担を軽減する策の方が効果的だと気づいた。</p> <p>裁判員として証拠品を見ることができると自信がなかったが、弁護士の方から話を伺って、誰もがそのように感じることを知った。心のケアをする機関も備わっているので、司法のねらいを実現するためにも、勇気を出して裁判員に選出されたら必ず参加したい。あまり知られていない裁判員経験者の声を発信することで、少しでも裁判員制度を身近に感じる人が増えるのではないと思う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の意見」「班員の意見」「ゲストティーチャーの話」を踏まえて、「自分には何ができるか」記述するよう指示し、生徒自身が意見の変容に気づくことができるようにする。 <p style="text-align: right;">【研究内容2-②】</p> <p>評価規準【思考・判断・表現】 裁判員制度やそれに付随する課題をわが事として考え、国民が司法参画しやすくなるための具体的方策や自分なりの司法参画の仕方を表現することができる。 (振り返り記述)</p>				